

Vision for the future. 6

舞台は世界 | グローバルに活躍する「会計プロフェッション」たち



日本公認会計士協会

The Japanese Institute of Certified Public Accountants

Contents

○ Interview 01 02

国連大学

K.K

地域によって異なる人々の生活や考え方、宗教等を尊重し、主体的に過ごしたことが今に活きている。

○ Interview 02 06

UNICEF(国際連合児童基金) ニューヨーク本部

今井 啓示

国際機関は世界の縮図のような存在。
人道支援の最前線をまさに肌で感じています。

○ Interview 03 11

独立行政法人国際協力機構(JICA)民間連携事業部

吉田 進一郎

公認会計士だからこそ、その専門性を活かして、
世界のためにいまできることを。

○ Interview 04 16

日本・米国公認会計士 フリーランスとして活躍

須能 玲奈

公認会計士のバックグラウンドを力に。
日本とニューヨークを繋ぐ私にしかできないこと。



地域によって異なる 人々の生活や考え方、 宗教等を尊重し、 主体的に過ごしたことが 今に活きている。

国連大学

女性会計士 Kさん (K・K)

1993年東京大学法学部卒。大学卒業後に結婚、2児出産後、1999年公認会計士二次試験合格。1999年に朝日監査法人(現 有限責任あずさ監査法人)に入社し、国際部に勤務。米国に2年滞在後、グローバル企業や外資系企業への勤務経験を経て、現在は国連大学に勤務。

大学卒業後、結婚～出産を経て公認会計士資格取得から社会人としてのキャリアをスタートさせたというKさん。家族での渡米、事業会社での勤務経験を経て、現在の国連大学での仕事に至った経緯やその道程、仕事の魅力について伺いました。

公認会計士資格取得が 社会人としてのスタート

—自己紹介と公認会計士を目指したきっかけをお話いただけますか？

大学卒業後、結婚し2児の出産を経て1999年に公認会計士二次試験に合格しました。女性が長く働き続けるためには専門知識と資格が必要だと考えていたものの、大学の専門課程で法律を学ぶうちに、自分は法曹の仕事ができるほど法律に興味を持ってない、と感じるようになりました。その一方で、会計の知識はどの企業、さらにはどういった職種でも必ず必要とされるはずだと思い、会計士資格の取得を決意しました。子育てをしながら勉強を続けるのは時間もかかり決して容易ではありませんでしたが、いつかは必ず合格できると思っていました。

—監査法人に入所されてからのお仕事についてお話しいただけますか？

1999年、2児の母として当時の朝日監査法人(現 有限責任あずさ監査法人)に入社し、国際部(アーサーアンダーセン)に配属されました。当時は子どもがいる監査スタッフは極めて少なく、他のスタッフに比べて限定的だったものの出張や残業もあり、働く時間を確保するだけでもエネルギーを要しました。監査の一環でクライアントの業務フローの理解に努めるうち、いずれは事業会社で内部統制の改善に直接関わりたいと思うようになりました。3年ほど経った頃、夫のアメリカ留学が決まりました。英語環境で暮らすまたとないチャンスだったので、退職も前向きにとらえ、三次試験の合格を見届けてから家族で渡米しました。

—若手会計士の方々に、海外駐在やグローバルな仕事に従事することにためらいを感じる大きな要因が言語の壁となっています。渡米される際は、どのように英語を学習されましたか？また、渡米前はどの程度英語を話せましたか？

学生時代の勉強のおかげで読み書きについては特に問題はありませんでした。会話は全くできなかったため、事前に基本的な会話の例文集を買って付け焼き刃的に練習しました。渡米した当初から買い物や、子どもの学校で先生と必要最低限の言葉を交わすなどはできましたが、予めもっと会話の練習をしておくべきでした。語学の上達には特別なコツなどなく、単語を覚

える、文法を学ぶ、音読をする、独り言をつぶやく等、地道に続けるしかないと感じます。また、趣味が身を助けてくれます。楽器を持参しサークルやスクールに参加するなど、共通の趣味を通じて交友関係を広げた友人もいました。

主体性がカギだった アメリカでの暮らし

—アメリカでの生活はいかがでしたか？

住んだのは中西部にある大学を中心とした街で、住民の多くは大学関係者や学生、自動車産業の関係者でした。治安は極めて良く、外国人留学生や駐在者も多かったため日本人が暮らしやすい環境でした。現地での経験を帰国後のキャリアに少しでも活かしたいと考え、子どもの通う学校でボランティアをし、日本語を勉強している大学生に声をかけて日本語と英語をお互いに教えあい、会計の勉強会を企画するなど、主体的に過ごしました。私も子どもたちも友人に恵まれ、楽しい2年間を過ごすことができたので、帰国してから15年が経ちましたが、いまだに家族で当時を懐かしんでいます。

ーアメリカで特に印象に残ったことや日本との文化の違いを強く感じたことはありますか？

アメリカに到着して早々大規模な停電に見舞われましたが、慌てる私たちをよそに同じアパートの隣人たちがのんきにプールで泳いでいるのを目にしたときには気質の違いを感じました。子ども連れで初めてバスに乗ったとき、小銭がなくて困っていたところ見知らぬ青年が黙って代わりに払ってくれたこともありました。地域により文化や慣習は異なりますので、事前に知っておくべきことを問われても特定の経験を挙げることはできませんが、どこであれ、おおらかに構えてそこで暮らす人々の生活様式や考え方、宗教等を尊重し、自らその地のイベントを楽しむと良いと思います。私は友人宅のサンクスギビングの集まりやハロウィン、インド人カップルの出産祝いのパーティー等、機会があれば積極的に参加し堪能しました。また、子どもの学校の友達には移民も多かったことから、自然と様々なバックグラウンドの方々を知り合うことができました。最も親しくなったママ友は故郷のインドネシアで宗教上の理由から大変苦労した末、アメリカへ移住してきた人でした。他方、会話のネタとして私は着物や浴衣、風呂敷や折り紙の本を持参しました。月並みですが、日本の文化を英語で説明できるよう準備しておくとお話がスムーズになります。また、向こうではたいてい持ち寄りパーティーに参加する機会があるので、定番料理などを予め決めておくと慌てずに済むと思います。

興味深かったのは、学校教育制度です。外国人の生徒をサポートする数々の仕組みがあり、子どもには英語が第2外国語である生徒向けの授業や、英語が話せる日本人スタッフのサポートがあったほか、有志の先生や保護者が開いてくれる懇親会で親も相談に乗ってもらうことができました。学校では時折、生徒も家族も民族衣装を着てそれぞれの国の食べ物を持ち寄るイベントも開催されていました。これは、生徒のバックグラウンドの多様性を表すものだと思います。また、当時ちょうど大統領選が行

われており、全校生徒が模擬投票を行う一大イベントを催すなど、学校が意識づけのために工夫していたことも印象的でした。

ー帰国されてからのお仕事についてお聞かせいただけますか？

帰国後は米国系のグローバル企業の経理部へ入りました。その企業のマネジメント手法は世界的に高く評価されていたこともあり、入社前は働くことを楽しみにしていましたが、大組織の中での限定的な職務や事業内容に興味を持てなくなり、当時精神的な支えであった書籍と関連サービスを扱う外資系企業へ転職しました。マーケティングスタッフとして売上の予測資料の作成、営業支援、イベントの開催やその効果測定などに携わり、経理とは異なる経験を積むことができました。前職ではエクセルスキルが低かったため苦労しましたが、そこで習得に努めた甲斐あって転職後は相対的にエクセル操作が得意な職員になっており、日々工夫する楽しさを感じながら働くことができました。その一方で、会計や管理上の問題点が気になり立場をわきまえずに改善提案をしてしまうなど失敗もしました。たとえ正論であったとしても、組織に認めてもらわなければ意味がないので、効果的なコミュニケーション方法を強く意識するきっかけになりました。また、売り上げと営業担当者至上主義の組織で自分の存在意義がわからなくなることもあり、自分の強みである会計分野から離れてキャリアを築くことに限界を感じるようになったところ、転職先として経理職のご紹介をいただくようになったことから、会計分野に戻ることにしました。

経理と税務の実務を経験すること、英語を使うことを目標に、外資系企業をクライアントにもつ会計事務所に転職しました。バックオフィス業務全般に加えて英文アナニュアルレポートの作成、連結財務諸表の作成プロジェクトなども担当し、日々手を動かすことで知識と経験が確実に蓄積されていきました。ミスを防ぎながら効率的にマルチタスク業務をこなすというバックオフィスの基本動作がその後活かされるこ

とになったと思います。この時期、USCPAの勉強を始めました。会計の基本を学び直し、会計分野の英語表現を学ぶこと、転職に活かすことが主な目的でした。また、学習を続ける親の背中を子どもたちに見せる意図もありました。勉強に伴う負担と疲労は予想以上で、中年以降の記憶力と体力の衰えを痛感しましたが、その分合格した時の喜びは大変大きいものでした。

ー国際機関である国連大学に転職をされた理由や国連大学でのお仕事についてお話しいただけますか？

きっかけは転職エージェントによる紹介で、事業目的が自分の価値観と合っていたため興味が湧きました。国際機関でありながら本部が日本にあるためトップマネジメントと共に働けること、小規模なので自分自身の裁量と貢献が明確であること、職場環境が多国籍多文化であることに魅力を感じました。国連大学本部のバックオフィスチームはマレーシアにあり、上司も経理部の同僚も海外にいる状況下、私は日本における経理全般の責任者として支払いを始めとした各種会計関連の承認業務を行うことになりました。その後、経理業務を可能な限りマレーシアに移管し、日本における処理は最小限度にとどめつつ購買や出張手配、人事関連のサポートも含めたバックオフィスのチームを統括する流れとなり、今に至ります。国連大学は発生主義を前提にしたIPSAS(The International Public Sector Accounting Standards)という国際公会計基準に準拠していますが、多くの職員が重視するのは現金主義に近い予算会計です。着任時はIPSASの適用直後だったので勘定科目には意味があることや、予算とは異なる費用の計上時期の重要性を職員に理解してもらうところから始めなくてはなりませんでした。正しい処理をお願いしても現場のスタッフから「今まではそれで問題なかったのに」と反感を買うこともあり、ルールの趣旨とミスや不正を防ぐための仕組みについて、度々説明することになりました。時には、海外のファイナンスオフィスの指示に対する現場の不満を受け

止め、板挟みになりながら仕事を前に進めなくてはなりません。日本のオペレーションの現場に即したルールや業務フローを考え、チェックリストやテンプレートを作成したり、それまで手作業で行っていた業務をエクセルなどで自動化するなどの工夫も重ねました。最近、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う自粛要請により、バックオフィスとしての対応に追われています。署名を電子サインに変更するなどペーパーレス化やそれに伴うマニュアル作りなどにも取り組んでいます。

—国際機関で働く面白さややりがいについて教えてください。

国連大学は14カ国に拠点を置いているほか、他の国際機関とも連携しています。世界中にいる同僚やパートナーたちと協力し合えることに喜びを感じています。入社初日からマレーシアで2週間の研修を受けた際には、会計という共通のバックグラウンドがあるおかげで予想よりスムーズに会話ができ安堵しました。この研修中、若手のインド人の同僚と懇親会の場でドリアンを食べながらおしゃべりをし、同年代の中華系の同僚とは夕食をとりながら教育事情について話したのは楽しい思い出です。同じオフィスの中で異なる民族、宗教、生活様式を持つ職員がうまく共存しているところに豊かな多様性を感じました。

2018年には調達購買の海外研修に参加しました。参加者の出身国はマレーシア、カンボジア、ミャンマー、インドネシア、イラクにネパール等多彩で研修は大変充実したものになりました。グループワークで各チームがそれぞれ経験した調達の例を挙げて設問に答えた際には、戦車、難民キャンプの蚊除けの網付きテント、島を巡るスピードボートなどが例示され、日本で働いている身としては驚きの連続でした。

監査の仕組みは特殊で、3カ国からなる監査団が順に任命され各国連組織に派遣され監査を行います。現在国連大学はチリのチームの監査を受けています。監査チームは毎年2～3週間東京に滞在するので、時にはトラブルに見舞われながらも監査



が終了する頃にはお互いに親しみが湧き、一緒に記念写真を撮ることもあります。監査の進め方も雰囲気も国とチームにより大きく異なります。インドチームは依頼事項が多く、監査部屋へ何度も足を運ぶうちカレー味のお菓子を勧められたことがあります。また、完璧主義のドイツチームの指摘の数々に感嘆させられたり、おしゃれな女性ばかりのチリチームと監査の合間に談笑したりとそれぞれが得難い経験です。

—国際機関で働くにあたって大切なことは何でしょうか？

偏見なく、様々な国籍やバックグラウンドの人たちを尊重し、一緒に働くことを楽しめることが大切だと感じます。さらに、柔軟性と視野の広さ、寛容さが必要です。色々なタイプのスタッフがいて想定通りに事が運ばないことや、社内の仕組みが日本の大企業のように整備されていないことはよくあります。仕組みや環境が完璧でないのは当たり前なので、批判に時間を費やすのではなく、どうすれば目的を達成できるのか、全体最適を視野に入れながら現実的な方策を考え提案し、実際に実行する力が求められると思います。更には、ほぼ全ての職員の雇用形態が有期雇用で、実績を組織に認めてもらうことによって契約を更新する仕組みなので、自分の働きが組織にとっ

て意義があると示す積極性も必要です。英語が公用語なので、言うまでもなく語学力は非常に重要です。また、国際機関は学歴主義の傾向がありますが、必ずしも日本国内で偏差値の高い大学が有利という訳ではありません。マネジメントポジションに就いて活躍するためには、修士以上の学歴があったほうが良いでしょう。

国際機関における 会計士資格の有用性

国際機関といえども資金を集め運用し、職員を雇用し財やサービスを購入して支払いをしているので、経理・人事・購買といったバックオフィス業務は必要です。公費を扱うため予算管理や内部統制は一段と厳しくあるべきですが、無駄なコストや手間を排除するための効率性も重要です。会計士はそれらの問題解決に必要な素養と経験を備えていると期待されます。私が応募したポジションは会計士資格を応募要件としており、監査法人や事業会社での勤務経験も評価されました。

—国連大学はどのような活動をされているのでしょうか？

国連大学は1973年の国連総会において、研究、大学院レベルの研修及び知識の普及に携わる学者・研究者の国際的共同体として設立された研究機関です。研究テーマは現在以下の3つを柱にしています。

•Peace and Governance

•Global Development and Inclusion

•Environment, Climate and Energy

研究結果は、主に学術出版物及び政策関連出版物や一般公開イベントを通じて発信されています。また、大学院学位プログラムを含む専門的な研修も提供しています。本部は東京青山にあり本部職員のうち約半数が外国人です。また現在14カ国に拠点があります。

—国連大学に勤務する前と後で、国際機関で働くこと(イメージ)に何かギャップを感じたことはありましたか？

現職は日本、しかもバックオフィス勤務ということで、さほどこれまでの経験とかけ離れてはいませんでした。勝手な思い込みで硬直的で融通の利かない組織なのではないかと予想していましたが、実際はそのようなことはなく、小規模であるためか日頃から業務改善が推奨される柔軟な組織です。それから管理職を含め職員にワーキングマザーが多いことが挙げられます。特にマレーシアの経理部のオフィスで働く職員のうちほとんどが既婚女性で子どもがいる人が少なくありません。仕事熱心ですが休みもきっちりとりまします。驚いたことは2013年の入社当時、小切手が頻繁に使われており、タイプライター、カーボン紙が現役だったことです。さすがに今では使われていませんが。

—今後のビジョンをお聞かせいただけますか？

子どもたちも社会人となり、自分自身のキャリアも終盤に差し掛かってきました。価値観に沿った生き方をして、少しでも社会に貢献でき収入を得られれば幸せだろうと思います。できれば定年後も働き続けたい

ので、そのための準備を始めたいです。世界各国の街を巡りながら、それぞれの街で短期間暮らすことにも憧れがあるので、健康に気をつけて語学の勉強を続けていくつもりです。

—ありがとうございました。最後に、公認会計士を目指す学生にメッセージをお願いします。

会計士資格は幅広い分野で活かすもの。興味のある分野で、会計を足掛かりに様々な可能性に挑戦していただきたいです。そしてどの分野であれ、容易には代替がきかない日本の会計の専門家としての優位性を十分に活かすことの重要性を伝えたいです。今後経理業務を含め事務作業の多くが労働コストの比較的安い地域に移管される流れが加速すると思われるからです。しかし、長期的には世の中がどう変化していくかは分かりません。アンテナを張りながら、その時々与えられたチャンスを活かして、精いっぱい働くことが次のステップにつながると思います。私も自分のキャリアを振り返ってみて、良かったことも辛かったことも含め全ての経験が色々な形で今の仕事に役立っていると言えます。

このインタビューは2020年5月、メール等を通じてまとめました。



国際機関は 世界の縮図のような存在。 人道支援の最前線を まさに肌で感じています。



UNICEF(国際連合児童基金) ニューヨーク本部

今井 啓示 Keishi IMAI

外資系一般事業会社勤務を経て、2010年にあらた監査法人(現 PwCあらた有限責任監査法人)に入所。テクノロジー業界を中心に、国内外の上場企業やIPO準備企業への監査業務やアドバイザー業務を担当した後、外務省本省の特定任期付職員として採用され、外部専門家として世界中の日本の在外公館に対する査察業務及び本省での監察業務に従事。任期満了後オーストラリアに留学し修士号を取得。ほぼ同時期にUNICEF(国連児童基金)の空席公募にて内部監査ポジションのオファーを受領し、現在はUNICEFニューヨーク本部にてアフリカや中東、東南アジアなどのUNICEF国事務所に対する内部監査業務を担当。2015年には日本公認会計士協会東京会非営利法人委員会の委員を務める。

子どもの頃から海外生活に憧れ、中学時代の夏休みのホームステイが国際機関で働くことの原体験になったという今井啓示さん。外資系企業への就職から会計士資格取得、外務省での監査業務を経て、現在のUNICEFでの仕事に至った経緯や思いについて伺いました。

公認会計士を目指した きっかけ

—自己紹介と公認会計士を目指されたきっかけを教えてください。また、会計士になってよかったと思う瞬間についてもお聞かせください。

私は子どもの頃から星空が大好きで、受験勉強などで疲れた時は、決まって自宅から見える星空を眺めていました。その影響もあって、子どもの頃の夢は研究者になることで、宇宙の謎を解明したいと考えていました。実際、大学では物理学を専攻したものの、あまりにも難しく、その道で生きていくのは無理だと早々に諦めてしまい、代わりに文系学生と一緒にサークルに没頭する生活を送っていました。就職活動の時期が近づいてくると、理系学生は大学院進学が当然という雰囲気の中、私は一般企

業への就職に向け就職活動をし、無事内定をいただくことができました。それまでは会計士がどんな仕事かも知らず、難関国家資格という程度の知識しかありませんでしたが、入社までに日商簿記2級の取得を勧められ、それをきっかけに会計の世界に興味を持ちました。至って普通の学生生活を満喫しており、目立った特徴や経験はありませんでしたが、日本の大手企業ではなく、当時まだ日本では名前も知れ渡っていない外資系の一般企業に就職したことが、少し違った選択をしたということになるかもしれません。そこで本社から駐在で来ている外国人と一緒に働く中で垣間見られた彼ら・彼女らの仕事に対する情熱やビジネスセンスに自分の無力さを痛感したことは、今でも覚えています。それが国際的な環境で仕事をするための最初の一步となりました。

外資系企業に入社した時点で、将来は転職を繰り返しながら自分のキャリアを作っていくのだろうと考えていたものの、いざ入社してみると「これが自分の強み」と言えるものがなく、時間だけが過ぎていくことに相当不安を感じていました。学生の頃とは違い社会に出るとテストなどは存在せず、自分以外の誰かの役に立って初めて周囲から認められるという環境のギャップにも悩み、そこで改めて「自分はど

ういった分野でどんな強みを武器に今後キャリア形成をしたいのか」と真剣に悩みました。結果「何かしら資格を保有していることで専門知識・貢献の場が増え、かつ強みを客観的に証明できる」という考えに至り、簿記2級に合格後も1級を目指して勉強を続けていたことや理系ならではの論理的思考、数字に強いこと、組織経営にも関心があったことから、最終的に会計士資格を目指そうと決めました。

これらの点は現在も活かされており、組織経営全体に係る点では、全体を俯瞰してみた時に問題点を重要性に応じて組織をマクロ的にもミクロ的にも議論できる点は、一般企業での業務との対比で、監査人としてのやりがいに繋がっており、また、今後のキャリアを考える上で様々な選択肢を与えてくれています。数字に対する強みは、現在UNICEFの内部監査室では監査業務にデータ分析の要素をより深く浸透させたり、業務の効率化や自動化を加速させることに役立っています。自身も数名の主要プロジェクトメンバーの1人として深く関与しており、同僚の中でも「データ分析に強い監査人」として認識されていると思います。会計士、特に監査業務に携わる人間として、日々の業務はクライアントへの付加価値提供が大前提ですが、多くの監査人が経験するように、クライアントとの意見の対立等

仕事が思うように進まないことの方が一般的で苦勞することも多いです。それでも、振り返ってみると、あの時監査人として言うべきことを言って良かった、クライアントとの共通の落とし所を見つけ結果として組織に、ひいては世界中の子ども達の笑顔に貢献できて良かったと思える瞬間は、毎日の苦勞を帳消しにし、監査人としての仕事にやりがいを感じる事が出来ます。また、この醍醐味を味わえるのは、公認会計士にのみ与えられた特権だとも思っています。

一 監査法人に入所されてからのお仕事についてお話しいただけますか。

2010年に現在のPwCあらた有限責任監査法人に入所しました。大学で物理学を勉強し、新卒で入社した会社で半導体関連に携わったことから、特にテクノロジー業界に関心が深かったので、その業界のクライアントを担当する監査部門を希望し、その通り配属していただきました。合計で5年超PwCに在籍しましたが、規模も大小様々、かつ種類も国内・外資系企業と本当に多くのクライアントの監査業務を経験できました。監査の計画から実行・完了まで、決められた一連の監査手続を体得すると共に、監査人の心構えや監査品質の追求、チームマネジメントといった、監査人として備えるべき全ての要素を叩き込むことができたと思います。お世辞を抜きに、ここで身に着けた監査人としての基礎は現在も仕事の隅々で活かされており、UNICEFに入って初めての国事務所監査で調書レビューの際、上司から“*He is a real professional*”と言っただけしたことは、日本で身に着けた監査に対する知識や経験が世界でも十分に通用することを証明していると自信を持って言えます。

正直、監査法人に在籍していた頃は仕事量や期日遵守、様々なレベル・立場の方々による日々のレビュー等でプレッシャーに押し潰されそうでしたが、結果としてその経験が今の自信に繋がっており、大変厳格なパートナーやインチャージの方から「監査品質には一切妥協をしない」という姿勢を学べたことは、監査人として

の修行だったと思っています。決算数値の妥当性をクライアントのビジネスと絡めて納得するまで追い求めていく姿勢こそが“データ分析に強い監査人”としての道を拓いてくれたのだと思います。

一 海外を目指されたきっかけを教えてください。

子どもの頃からのいろいろな要素や経験が積もって「海外で働いてみたい」と思うようになりました。その1つが小さい頃から通っていた地元の英会話教室です。ここで英語の発音や大勢の前でスピーチをするといった訓練をしたことで英語に自信が付き、「いつか海外で生活してみたい、働いてみたい」と思うようになりました。また、中学1年生の夏休みにアメリカでホームステイした時、バスでメキシコに行ったのですが、国境を越えた途端にいわゆるストリート・チルドレンに遭遇し、1人の子どもにお金をあげようとしたら、他の子ども達も同様にお金を頂戴と懇願してきたことがありました。その光景は、今でも鮮明に記憶に残っていて、貧困問題について考えるきっかけにもなり、現在のUNICEFでの仕事にも文脈としてつながっている気がします。

国際機関を目指す決定的なきっかけとなったのは、外務省での監査業務です。外

務省で最初に査察に訪れた国が世界最貧国の1つと言っても過言ではない、マラウイというアフリカの国でした。マラウイに対して往査前は貧困や犯罪といったネガティブなイメージを持っており、現地に降り立った際の印象は、テレビで見ると一面広大な平地が続き、お世辞にも綺麗とは言えない家々が並ぶ典型的なアフリカの国、といったものでした。しかし、現地では出会った方々のたくさんの笑顔や毎日を生き生きと暮らしていることを肌で感じることで、自分が仕事であれこれ悩んでいるのが馬鹿らしく思うようなことさえありました。その一例が、滞在中、日本で不用となった靴を現地の子供達に寄贈するというプロジェクトで、その靴を履いた子供達と5kmのfun runを行うイベントです。これは現地で靴を履く文化・習慣がない人々に対し、足裏を通して感染し、最悪の場合死に至る感染症を防ぐ目的で行われたものですが、走りながら靴で大はしゃぎしている子供達だけでなく、見ている大人達も興味津々で終始笑顔に包まれたイベントとなりました。このような今まで日本で経験することができなかった世界の実情を、まさに肌で感じる事ができた体験がもととなり、海外、特に国際機関で働いてみたいと、強く思うようになりました。



—実際に海外に行かれて大変だったこととその内容を教えてください。

当初、仕事の進め方には戸惑いました。日本の現場では、チームで問題点や疑問点などをすぐに共有し解決に向け全体でアクションを起こしていくイメージですが、アメリカでは個人の裁量に大きく委ねられています。チームで共有というよりは自身で事前に報告事項にするか否か、する場合はどういった文面で報告するかなどを論理的に組み立てた上でドラフト文書を作成し始め、本格的なチーム全体でのディスカッションは、個々人の報告事項を合体させるタイミングで行われます。もちろん、最低限のアップデートは随時チーム内で行われますが、日本より希薄です。

これは、海外での就職、とりわけ国際機関での仕事は、事前に仕事内容が定まっている特定のポジションに応募し、オファーをもらうという慣習に起因すると考えられます。採用される人は、その道のプロフェッショナルとして組織に貢献していくことが前提となるので、私のように初めての国連勤務と言えども、1人の独立した専門家として見られ、知らないから、遅れているからと言って誰かが助けてくれる訳ではないので、分からないところは自主的に解決し、決められた仕事内容を確実にこなしていくことが求められます。一見するとシビアな世界のようにも見えますが、私としては監査人としての専門性を追及するという意味で、健全な仕事環境だと感じています。昨今の国際機関では、予算削減により自分のポジションがある日突然無くなるなどさまざまな状況が起こります。だからこそ、どのような状況下でも人的ネットワークを大事にしながら、常日頃から自分の専門性を磨き、組織に求められる人材になることが必要だと思います。その意味で「差別化」という観点は重要で、監査という軸を確固たるものにすると同時に、私の例で言えば“Data Analytics and Technology”といった差別化要素と言える枝を幾つも身に着けていくことが大切です。唯一無二の存在として組織内での立場を確立するために、常に自分自身をアップデートしてい

かなければいけないので大変ですが、海外で挑戦することのダイナミズムだと感じています。

—海外に行かれる前に準備しておけばよかったことや後悔したことはありますか。あれば、その内容を教えてください。

現在の状況下で必要性を感じるものがあれば今からでも行動することをお勧めします。強いて例を挙げるなら、世界史を勉強しておけば良かったと思っています。高校・大学と理系の道を進んできたので学校教育で世界史を勉強したことがなかったため、日本で定番となっている世界史の書籍を取り寄せ、現在も思い出せば仕事に関連する部分を読み、インターネットで知識の習得に努めています。また、現在世界中で論争となっていることや宗教観の違い、国と国の力関係などは歴史を紐解くことで根本的な部分の理解が進みます。地域間の紛争の原因に対してUNICEFがどうアプローチして子ども達を支援しているのかという活動の背景を知ることができるので、この業界では監査であっても必要な知識だと思います。国際機関を目指す方に対して世界史を勉強して備えておくべきだと主張する気はありませんが、一般教養として世界中の料理やスポーツ、文化など、広く教養を持っておくことで普通の会話でもコミュニケーションが取りやすくなるので助けになると思います。

—英語力の不安が要因となり、海外に行くことを躊躇される会計士の方もいらっしゃいますが、海外赴任前の英語力についてお聞かせいただけますか。また、英語の勉強方法についてもお話しください。

正直、現在も英語力という意味ではネイティブとは程遠く、むしろ国連職員を名乗るのが恥ずかしくなるレベルだと自分では思っています。知識に乏しいトピックでは飛び交う単語すらわからず、発言が求められる際は言葉に詰まることも多くあります。そのため、どのように勉強すれば万全ということは言えませんが、私が意識してやっていたのは、仕事と絡めて語学を学ぶとい

うことです。PwCに在籍時は、1年目から外国人スタッフがいるチームに配属されたため、退所するまで彼らとディスカッションしながら監査を行ったほか、SEC登録企業の担当Teamメンバーに志願し、比較的英語を使って監査をする機会を得ていました。大学院留学時にはPwCでご縁のあった先輩からのご紹介で期末監査の2か月弱、PwCメルボルンで働く経験を積むこともできました。自ら積極的に手を挙げることで比較的英語を使って監査をする機会を得ることができたと思います。また、特に有益だったと思うのは、米国公認会計士資格の取得です。この資格を取得する過程で財務・管理会計や税務・法律・ITなど幅広い分野での英文知識や表現、そして単語をビジネスという観点で知ることができました。こういった知識や業務経験が現在英語を使って仕事する上で基礎になっていることは間違いありません。

UNICEFではいろいろな英語レベルの方が働いています。英語が日本で言うところの“上手”であるに越したことはありませんが、どのような局面においても共通して言えるのは、いかにネイティブのように話すかではなく、何を話すか、議論が実りあるものになるためにどう貢献(input)するかが最重要視される、ということです。これは、日本でも意識して生活することで磨きをかけられると思いますし、海外でのコミュニケーションで役に立ちます。英語に限った話ではなく日本語であったとしても堂々とロジカルに、そして時に情やユーモアも交えながら発言する意気込みが重要です。こうしたマインドセットを大前提として、拙い発音やゆっくりしたスピードの英語でも徐々に磨いていくことで、海外で十分に対応できると思います。

—UNICEFでは、どのようなお仕事をされていますか。

UNICEFは子どもを対象として世界中で「プログラム」と呼ばれる活動を実施しており、私は現在、内部監査人として働いています。このポジションでは、世界中に存在するUNICEFの国事務所に対する内部

監査の実施が主として求められ、それ以外に本部が対象の、または組織横断型のアドバイザー業務のサポートもあります。これまでマレーシアやレバノン、ナイジェリア、中央アフリカ、南スーダンといった国事務所の内部監査に従事してきました。その中でも、各国で実施されているプログラムのインプットとして重要なパートナー組織に対する資金供与や調達業務を中心に、その他にもドナーへの報告プロセスや国事務所の財務・人事・リスク・セキュリティ管理といったプロセスへの内部監査業務を実施しています。監査法人時代の外部による会計監査と比較すると類似点はありますが、決定的な違いとして、内部監査は業務監査に重点を置いているという点があります。これは既存の業務プロセスに対して改善策をクライアントと合意し、実際にそれが導入されるまで追求するという点で、クライアントから独立した立場でプロセスに対して付加価値の追求が期待されていることを意味しています。実例として、ウォークスルーを実施し、いわゆる内部統制3点セットをクライアントと共に作成した上で、統制テストや実証手続を通して発見した不備について単にそれを指摘するだけでなく、発生した根本原因を深く聞き取り調査し、担当者間でのコミュニケーションの問題や担当者が複雑なマニュアル作業を行っているといった要因を識別しました。そのケースでは根本原因に起因して考えられるリスクの重要性をクライアントと共有し、リスク軽減措置の導入までをモニターすることとなりました。

一国際機関で働く面白さややりがいについて教えてください。

一緒に働く同僚と、業務内容です。内部監査を担当する同僚が現在20名弱在籍しているのですが、国籍やバックグラウンドという点でいろいろな方と一緒に働くことができます。日本にいた頃では想像すらできなかったルワンダやウガンダ、ザンビア、コートジボワール、ガーナといったアフリカ出身の人もいれば、欧州、北米、オーストラリア、インド、フィリピン等、世界中の

人材が1つのオフィスに集まっています。そのおかげで各国・地域の雰囲気やトピックを伺い知ることができ、「世界をギュッと縮めたような空間」が体験できます。毎日が本当に新鮮で同僚が持っている知識や経験も様々なバックグラウンドに由来していて興味深いです。例えばPKO、WFPやUNHCRといった類似の国連人道支援機関、国際NGO組織といったパブリックセクターを主として経験してきた同僚もいれば、一般事業会社のCFOや金融機関などのプライベートセクター出身の同僚も混在しています。各々が独自の視点を持ち合わせ一緒になって監査を成功に導く過程は、まさにダイナミズムそのものです。

そして、やはり何と言っても人道支援の最前線を肌で感じながら仕事ができる点は最大のやりがいです。実際に往査する場所として、例えばエボラ出血熱の対応にあたっているコンゴ民主共和国や武装勢力が現在進行形で活動しているナイジェリア北東部等がありますが、実際に足を運ぶことで最前線で活躍しているUNICEFスタッフや笑顔で頑張っている子ども達を見ると、直接的ではないにしろ自身の仕事が過酷な場所で生活している彼ら・彼女らのためになっているということに本当にやりがいを感じます。私が実際、現地視察として訪れた場所にシリアとの国境付近に位置するレバノンのバールベックという場所があります。そこは2011年から始まったシリア内戦により難民として逃れる形で生活をしている子ども達が多くいる場所でもあります。そこでUNICEFから自立支援のサポートを受けている子ども達と直接話す機会がありましたが、難民という言葉とは裏腹に、日本の子ども達と同様に好きなサッカー選手の話をする男の子やアジア人を初めて見たのかスマホで一緒に写真を撮ってと話しかけてくる女の子もいたことが今でも記憶に残っています。

ニュースだけでは伺い知ることのできない実際の現場や逆境下でも笑顔で喜ぶ子ども達の姿を仕事を通じて見られる醍醐味は、国際機関で働く者の冥利に尽きます。



一国際機関で働くにあたり、公認会計士の資格があることの有用性はありますか。

国際機関では、典型的な日系企業とは異なりポジションごとに個別に内定が出ます。会計士に関連して言うと、比較的親和性があるのは監査法人で監査を経験してきた方だと、AccountantやAuditorもしくはFinance/Budget Officerなどのポジションだと思います。そうした求人では、応募条件としてCPAやCAの資格を保有していることが前提となっているものが大半です。それは日本の会計士資格であっても何ら問題はないので、資格を持つこと自体が国際機関でのキャリア形成にとって有用であることは間違いありません。

また、国際機関での求人は、過去の職歴にも細かい指定がされています。Auditorを例として挙げると、「最低XX年以上のAuditの経験、特にBig4での経験を優遇する」といった文面が目立ちます。日本で監査法人での職務経験を積むには、日本の公認会計士試験で論文式試験まで合格することが一般的に求められるので、会計士資格の取得がなければ監査法人での職務経験が得られず、必然的に国際機関での求人要件を満たさないことが想定されます。そのため、公認会計士の資格は最低条件とも言えます。世界的に認知された資



格という点で、公認会計士資格は客観的に候補者の能力を証明できるため、内定の可能性を上げるに足る十分な根拠になると思います。

—今後のビジョンについてお聞かせください。

現在も悩みは尽きませんが、若い頃、とりわけ20代は自分のキャリアについて悩むことが本当に多かったです。どの道に進むことが正解という絶対的な解はないとの信条の下、その都度悩みながら、自分が決めた道で頑張ってきました。最初から国際機関を目指していた訳ではなく、その時々でいろいろな人達に感化され、公私共に様々な経験を積む中で、人道支援が求められるような人達に貢献したいと考えるようになり現在の仕事を通じて夢を実現しています。自分の希望やビジョンは、置かれた状況下で刻一刻と変わっていくものなので、あくまで現時点について話せば、将来は人道支援や開発の現場により近いところで監査という仕事を通して支援が求められる人々に貢献したいと思っています。それを大きな方向性とし、さらに求められる専門性を高めるという視点で、再度Big4などのプロフェッショナルファームや広い意味でプライベートセクターに戻ることも選択肢の1つとして捉えています。国際機関は前述の通り専門家集団であるものの、最先端の監査手法

やその周辺知識・経験がプロフェッショナルファームから生まれていると現在感じています。例えば前述の“Data Analytics and Technology”という部分に関して言えば、監査の文脈で議論する上で、Big4は1つの組織では得られない程の知識と経験を持っており、その他の領域においても監査という視点で話をする上では圧倒的な差があります。土業としての宿命とは思いますが、どのような道を経由したとしても、専門性の追求は終わりがないので、それも選択肢の1つかな、と考えています。

考えや希望は変わっていくので大きな視点を持ちつつも、目の前の仕事や毎日の小さなことに全力を注いでいくことで次のステップや今やるべきことが見えてくるものだと思っています。

—ありがとうございました。最後に、若手公認会計士あるいは公認会計士を目指す学生にメッセージをお願いします。

インタビューをお読みになる方の中には、私のキャリアが、一見すごく綺麗かつ最短距離であるように感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、実際は紆余曲折、失敗の連続であり、悔しい思いも何度も経験してきました。それでもめげずに自分の実現したい夢や希望のために、毎日少しずつ小さな努力を積み重ねて来たことが、今に繋がっていると信じています。私も大多数の会計士受験生と同様、無職で資格の学校に通いながら公認会計士資格を取得し、大手監査法人に就職した通り、至って典型的な道からキャリアが始まっています。約10年前に初めて公認会計士としてのキャリアを日本で始めた当時、現在UNICEFで自分のチャレンジしてみたいと思うことができている現実には、想像すらしたことがありませんでした。自分がやってみたい、成し遂げたいと本気で思うことに会った時、周囲の人が揶揄しようが反対しようが、目標に向かって“実際に行動に移す”ことが、ここまで来られたことの原点だと思っています。

今まで仕事面や私生活において大小様々な課題に直面しましたが、その時々

で、目標を立て、それに向かって周囲、特に家族の同意やサポートを得て、実際に小さな努力を毎日積み重ねてきたことが現在の環境を与えてくれたものと確信しています。

やるからにはやり切ったと思えるだけの努力が必要となるので、一念発起して会計士を目指す、または会計士というキャリアを今後の武器にするのであれば、自分は何に対して関心を持ち、どういった道で活躍したいのかを考え、そして何よりそれに向かって“実際に行動に移す”、壁にぶつかっても根気強く前に進むということが、抽象的ではありますが自身を成長させるための重要なポイントだと思います。若いからこそできることや許されることはたくさんあります。是非その特権を利用して、毎日を意欲的に過ごしてください。皆さまのご活躍を本当に期待していますし、どこかでお話しできることを楽しみにしています。

このインタビューは2020年9月、メール等を通じてまとめました。



公認会計士だからこそ、 その専門性を活かして、 世界のために いまできることを。



独立行政法人国際協力機構(JICA)民間連携事業部

吉田 進一郎 Shinichiro Yoshida

2003年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業。同年中央青山監査法人に入所後、2007年太陽監査法人に移籍。製造業、運送業、ウエディング、外資系等、幅広いクライアントの監査を担当。2010年に独立行政法人国際協力機構(JICA)に入社し、財務部での経理業務、ジェンダー平等・貧困削減推進室にてマイクロファイナンス及び金融包摂のプロジェクトや研修講師として活動のほか、人身取引対策や女性の経済的エンパワメントのプロジェクトにも従事。駐在員として中華人民共和国事務所にて農業・環境・法整備等のプロジェクトに従事した後、2018年～2019年にはソーシャルビジネスやインパクト投資を学ぶためイギリスのLondon School of Economics and Political Science(LSE)に留学し、修士号を取得。現在はJICA民間連携事業部にて海外投融資(途上国の開発に資する民間企業への出融資)の案件監理や海外投融資全体の管理会計業務に勤しむ。

幅広い活躍のチャンスを探求めて、公認会計士に。そして、社会に貢献できる仕事を追って、JICA職員に。途上国の発展に貢献し、現地の人たちに寄り添う、吉田進一郎さんに、公認会計士だからこそできる国際協力について伺いました。

公認会計士を目指すきっかけと 監査法人時代

—自己紹介と公認会計士を目指したきっかけをお話いただけますか。

私は2003年に早稲田大学政治経済学部の経済学科を卒業し、その年の10月に公認会計士二次試験に合格しました。学生時代に「手に職をつけて、プロフェッショナルとして仕事をしたい」と考えていて、経済学部にはということもあり、幅広い活躍のチャンスがあるであろう公認会計士を目指した、というのがきっかけです。想像以上に受験勉強が大変で辛かったですが、無事に合格することができました。そして中央青山監査法人に入所し、幅広い業界の監査業務を担当しました。2007年に太陽有限責任監査法人に移籍したのですが、ここ

では1年ほど主査をやり、8カ月ほどの語学留学を挟んでJICAに転職し、今に至ります。

—監査法人時代の仕事内容と、経験して良かったことを教えてくださいませんか？

監査法人時代は、製造業や運送業、ウエディングや外資系など、幅広いクライアントの監査を担当させていただきました。太陽監査法人では主査業務も経験しました。中には非常にリスクの高いクライアントも担当し、当時は本当に大変でしたが、今となってはいい思い出で、貴重な経験をしたと感じています。会計士として監査法人で働いて何より良かったのは、同僚に恵まれたことです。それはもう、会計や監査のプロとして高い専門性を持っている人ばかりで、困難な状況でも動揺せず即断即決できる人であったり、クライアントと厚い信頼関係を築いている人だったり、そういった尊敬できる人が多々いる中で、彼ら・彼女らの背中を見ながら仕事ができたとするのは大変貴重だったとあらためて思います。「会計士としての知見を生かして欲しい」ということで今の仕事に就けたと思っておりますので、監査法人の経験があったからこそ、その後の可能性を広げることができたと感じています。

国際協力へのチャレンジ JICAでの仕事

—国際協力分野に進むきっかけと、現在の仕事内容について教えてください。

自らの持っている専門性を活かして社会に貢献できる仕事をしたいという思いを常に抱いていました。そこで「自分に何ができそうか」ということを考えた時に、国際協力という分野で何かできることがあるのではないかと思います。そんな時にJICAで中途採用を募集していたので、手を挙げ入職しました。

JICAでは、最初は財務部門で経理業務に携わった後、貧困削減やジェンダーイシューに取り組む部署に配属になりました。金融包摂といい、世界に10億人以上いるフォーマルな金融サービスにアクセスできない人々にマイクロファイナンス等を通じて金融サービスへのアクセスを拡大しようという取組があり、これに関連する技術協力プロジェクトや調査、講師を担当しました。また、ジェンダーという観点では、東南アジアにおける人身取引対策や女性の経済的エンパワメントのプロジェクト

クトに従事しました。その後は中国にて駐在員として、3年ほど環境や農業、法整備の案件等を担当しました。

その後、JICAを退職し、イギリスのロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの修士課程でソーシャルビジネスやインパクト投資を学び2019年に帰国し、今に至っています。今の部署では海外投融資といい、途上国の開発に資する民間企業に出資や融資をするスキームに従事しています。この事業の案件監理や、海外投融資というスキーム全体の収益性やリスクを計測するために、管理会計のとりにまとめを行っています。海外投融資の案件としては、プロジェクトファイナンスとしての再生可能エネルギー事業や金融機関への融資、企業及びファンドに対する出資案件を担当しています。

—現在の業務内容について具体的に詳しく教えてください。

海外投融資という、途上国の貧困削減やインフラ開発、環境や社会の課題解決に貢献する活動を行っている民間企業に出資や融資をするスキームにて、案件組成後の監理をする業務に従事しています。具体的には先ほど触れたことと重複しますが、プロジェクトファイナンスで行っているモンゴルの風力発電事業や、ペルーの日

系社会を起源として設立された組合の金融機関への融資案件、途上国のマイクロファイナンス機関への出資を行っている企業や、アフリカの人々にソーラーランタンを提供する企業、世界の女性の金融アクセスを拡大することを目的に活動しているファンドへのリミテッドパートナーズとしての出資案件等の案件監理を行っています。融資案件ではお金が本当に返ってくるのか、すなわち信用力が落ちていないか、特にプロジェクトファイナンスでは、元利金返済分以上のキャッシュフローを十分に生み出しているのかなどを日常的にモニタリングしています。出資案件ですと、株主として投資先の事業計画の達成状況確認や議決権の行使、ファンド案件では当初計画していたとおり投資案件が作られているのか、IRR(内部収益率)等の財務パフォーマンスが想定どおり表れているのかといったことを確認しています。また、JICAとして開発効果を目指して投融資を行っているものなので、例えばマイクロファイナンス関連案件だと女性への金融アクセスがちゃんと当初狙ったとおりに拡大しているのか、あるいは、マイクロファイナンスの顧客がどのように日常的にお金のマネジメントをしているのかや投資先が提供する金融商品が顧客のニーズに合致して

いるのかを確認するための調査を行うなど、財務面以外の成果も見ています。日常的には、どちらかという財務面を見ることが多いものの、開発機関として開発効果の視点も踏まえながら案件の監理を行っているというものです。

一方で、海外投融資というスキーム全体の管理会計も行っていきます。これは、組織の経営層をはじめとする内部向けに、「海外投融資全体のポートフォリオとしてどのような財務パフォーマンスを出しているのか」を報告しています。どのような前提を置いて会計処理をすることが現在の海外投融資のオペレーションの実態を表しているのかといった検討をしながら管理会計の数値を作り分析しています。

—ありがとうございます。今はコロナの影響でなかなか海外に渡航することが難しいかと思いますが、業務上、実際に海外に渡航することやプロジェクト単位で駐在するようなことはあるのでしょうか。

JICA職員という立場だと、プロジェクト単位で駐在することは基本的にはないです。他方、出張することはあります。例えば案件内容を検討するための調査を行い、案件内容について相手国政府と合意に向けた協議をするといったことです。他にも、案件で何か問題が生じた場合にその現場を確認することや、案件の軌道修正するために相手国政府や現地の最終受益者にインタビューをすること、プロジェクトが予定していた開発効果を出しているか評価をするために現地に出張へ行くことがあります。ただ、現在は基本的にリモートで現地の方とコミュニケーションしており、相手国政府や出融資先の人々とオンライン会議やメールを通じてコミュニケーションすることが多いです。最近では、担当している案件で或る国のセクター全体に関わる問題があり、その国の他のドナー、例えば世界銀行やアジア開発銀行、欧州復興開発銀行などとオンライン会議をして相手国の課題解決のためにはどのような方策を取るのが良いかなどをディスカッションしました。



国際協力の仕事 苦勞とやりがい

一業務で大変だったエピソードや、やりがいなどについてお聞かせください。

まず何より、JICAに入った当初は国際協力の経験がなかったので本当に右も左も分からず苦勞をしました。監査は基本的に会計基準や監査基準という拠り所になるガイドラインがあり、それらに照らして判断するということになります。一方、国際協力では、必ずしも明確な判断の拠り所がないことが多々あり、かつ予測もしていなかったことにも遭遇します。判断の軸のようなものが私にはまだ分らなかったのが大変でした。

やりがいに関しては、例えばホンジュラスの貧困層の金融アクセスの拡大を通じて生計向上を目指すプロジェクトの案件形成のために、チームと共に現地へ出張に行った時に感じたものが挙げられます。出張という限られた期間中に相手国政府と合意しないといけないため、相手国政府や現地の貧困層の方々、マイクロファイナンス機関等様々な関係機関にもインタビューを行い、夜にその情報をまとめつつ相手国政府との合意文書のドラフトを作成し、これが深夜にまで及ぶような日もありました。非常に苦勞しましたが、やはり『相手国の重要な課題解決に貢献できる』というところには、大きなやりがいを感じます。ホンジュラスでは、政府から補助金を受けている低所得層の方に、彼ら・彼女らが毎日、毎週あるいは年間を通じてどのように収入を得て、どのような支出を行っているのか、預金口座があるのか、フォーマルな金融機関からの融資などの金融サービスにアクセスできるのかなどを実際にこの目で見て、聞いて、これに対する解決策をチームや現地政府とも協議し、その上でプロジェクトの内容を考えました。正に対面した人たちの状況を改善するためにプロジェクトを行っているんだという、『誰のために行っている仕事か』を



実感できたからこそ、ハードワークもこなせたと思っています。おそらく国際協力の分野にいる多くの人が同様の思いを抱いたことがあるだろうと思います。

このプロジェクトは数年前に形成したのですが、最近近況を知りました。プロジェクト自体は対象地域が特定のエリアに絞られていたのですが、対象地域でとても良い成果が出て、「この取組は素晴らしい」と、対象地域の外にもプロジェクトのアプローチが広がっているそうです。それを聞いた時はとても嬉しく感じました。

一国際協力に携わる仕事では高い語学力が要求される印象ですが、語学面で何か不自由を感じたこと、また勉強方法について教えてください。

不自由に感じることは今でもあります。8カ月ほど語学留学をし、イギリスの大学院にも行ったものの、やはりネイティブスピーカーには敵いません。英語力は自分自身でもまだまだだと思っていて、今でも不安はあり、英語での電話会議があると、構えてしまいます。電話会議の前では発言内容や、こう発言をしたらこのような返しが来るかもしれないといったことを事前に考えた上で臨むようにしています。母国語

ではないので、その場で臨機応変に反応しなくてはいけない時に反応が遅くなってしまうなど難しい面があります。そのため、今でも英語は毎日勉強しています。記憶の忘却曲線に配慮した暗記アプリを通勤中に使ってポキャブラリーを増やしたり、英語でのプレゼンをまとめたサイトを毎週聴いて、聞き取れなかった部分を録音して、覚えるまで繰り返して聴いたりしています。ネイティブと対等な語学力になることはないだろうと思いますが、だからといって諦めていい訳ではなく、事前準備の徹底や、勉強する環境は本人の意志次第で作れると思いますので、毎週1%ずつでも上達する努力をすることが大事だと考えています。

一次に、国際協力分野で働くにあたって大事にしていることなどをお伺いできればと思います。

これはいろいろな意見があると思いますが、私は自戒の念を込めて、想像力が大事だと思っています。特に途上国を相手にする場合には予測不可能なことや避けられないことが起きることもあります。予測不可能なことがないように、仮に起きたとしても慌てず対処できるように、できるだけ

想像の幅を広げ準備をすることが重要です。さらに、相手国政府・投融資先・日本人の専門的知見を持った人材等多くの人々とのスムーズなコーディネーションも重要になります。相手の利害を踏まえ、どのように伝えたら相手は納得するだろうか、トラブルの種になり得るだろうかといったことにも配慮するようにしています。

あとは精神論的にはなりますが、やはり『最終受益者は誰か』という想像力も必要かなと思っています。JICAでの事業の直接的な協力相手は、相手国の政府機関や民間企業となり、さらにコロナ禍で現場に行けない現状では忘れがちになるのですが、事業は現地の人々の課題解決に少しでも貢献することを目指すものです。例えば、私は東南アジアでの人身取引被害者の保護・社会復帰を目指すプロジェクトを担当した際に、タイやミャンマーでの人身取引の被害者を保護しているシェルターを訪問したことがあります。具体的な表現は控えますが、普段私が日常生活を送っている中では目にする事のない厳しい状況に置かれた若い人や子どももいました。また、ホンジュラスでは、現地での仕事で私がプロジェクトの構想を適切に描けず、当時の上司から「お前がチンタラやっている時間が、途上国の困っている人たち、貧困層のどれだけの人に貢献できる機会を奪うんだ」といった叱責を受けたこともありました。その時のことは非常に印象に残っています。普段の業務を行っている最終的な受益者の姿が見えづらくなります。さらに、人々の抱えている課題は複雑で、担当プロジェクトだけで例えば対象地域の人々が貧困から脱却できることは決してありません。それでも、『自分が誰のため、何のために仕事をしているのか』という視点は、忘れないようにしたいです。

—ありがとうございます。なかなか予測不可能な場面が多いかと思いますが、想像力を広げてシナリオを描いたものの、予想していたシナリオと違ったということはよくあるのでしょうか。

たくさんあります。そのような時は、切り

替えて、どのように持ち直すか、その時でできることを考えるしかないと思います。例えば、ミャンマーではクーデターが起きましたし、コロナの影響も然り。インドの医療分野で進めようとしていた案件が、コロナ禍で動きが取れなくなってしまったということもあります。諦めれば良いという意味ではなく、限られた状況下で自分が何をできるのかということ、周囲の人々や他の機関なども相談しつつ、コントロールできる範囲でベストを尽くすということが重要だと思います。

国際協力分野における 公認会計士の価値

—国際協力分野における公認会計士の価値などをあらためてお聞かせください。

分野にもよるものの、やはり会計や財務、監査の知見があるというのは強みになると思います。今携わっている海外投融資は、投融資先の財務諸表を見て信用力を判断したり、投資先と監査法人の関係性について検討したり、あるいは管理会計で実際のオペレーションを反映する収益や費用の計上のあり方を検討したり、経験が活かされているシーンは多いと思っています。

もっと概念的な話をすると、プロジェクトで持続的な開発効果を出すためには、財務面の持続性も確保することが重要になります。例えば、先ほどのホンジュラスのプロジェクトでは5年間にわたり日本から技術協力を行うものでした。5年経って日本からの支援が終わった後もそのプロジェクトの効果を持続させるためには、財務持続性という視点も必要になります。政府からの予算は手当てできるのか、提携した現地の民間企業がプロジェクト終了後も顧客に継続的にサービスを提供できるようなビジネスモデルを確立したのかということが重要となります。途上国の貧困層を対象に金融サービスを提供するマイクロ

ファイナンスも同様で、ビジネスとして行うものである以上、財務的な採算をとれるようにしなければいけない。例えばコスト削減の方法として、支店を設けずにデジタルを駆使して金融サービスを届ける、資金調達コスト等も踏まえ融資の金利を何パーセントにするかを検討するといった視点が必要になります。開発効果なり社会的パフォーマンスと財務的パフォーマンスを両立させるという観点でも、財務の専門性は有用で、会計士としての知見は役に立つと思います。

—次に、吉田さんが考える「国際協力分野に向く人、不向きな人」をお伺いできますか。また、国際協力分野の仕事に従事する上で重要なと思う点をお伺いできればと思います。

軸としては先ほども申し上げたとおり『最終受益者のことに意識を向ける』ということが重要だと思います。あとは、困難なことや不確実なことをある意味楽しめるということも重要なのだらうと思います。また、知らないことを学ぶ姿勢も大事だと考えています。なぜなら、今まで全く触れていない分野に携わることが頻繁にあるからです。私も、現在携わっている海外投融資において、確かに財務や監査の経験はあるものの、自分自身が投資家側の立場に立ったことが今までありませんでした。出資者あるいは貸し手として相手とどう付き合うのかなど、今まで全く経験がなかったことにも貪欲に、新しいことでもゼロから吸収していくということは大切だと思います。

また、自分自身がすべての分野の専門家になることは不可能なので、コーディネーション能力も大事だと考えています。例えば、私が人身取引対策の専門家かという決してそうではなく、案件形成時には、その分野の知見のある人の知恵を借りながら、プロジェクトの全体像を考えます。医療のプロジェクトだと、医療分野の方からの知見を活用したり、法令、法整備のプロジェクトだと法律の専門家、環境だと自然環境分野の専門家に協力いただき、専門



家の意見をまとめたりなど、コーディネーション能力も必要だろうと思います。

—今後のキャリアビジョンやこれから携わっていききたいことをお聞かせください。

先ほど触れたマイクロファイナンスや今携わっている海外投融資、イギリスの大学院留学でも学んだソーシャルビジネスやインパクト投資にも共通することとして、財務面での採算を取りつつ、開発効果や社会的パフォーマンスを出すことが、難しいものの、重要だし面白いと思っています。私は公認会計士で、公認会計士としての専門性は財務になるので、これを活かして『社会により良い効果を出していく』ということに、今後も取り組んでいきたいと思っています。

—最後に、公認会計士を目指す学生に向けてメッセージをお願いします。

公認会計士の知見は、監査に限らず多くの分野で活用可能だと思います。監査についても、現在の業務で投資家側の立場に立ってみて、その重要性を非常に強く感じています。投融資先の財務諸表を見る際に、やはり未監査のものは『どこまで信

用したらいいのか』と不安を覚えます。投資家側の立場から意思決定をする上で監査意見の有無は重要な情報だと実感しています。私が監査に携わっていた頃は、監査の重要性を実感として感じられなかった面も正直あるのですが、投資家側に立った仕事をしてみて、監査意見の重要性を再認識させられました。

また、公認会計士の受験勉強はとても大変だと思います。私は学生時代、公認会計士試験の受験に備えて、「大学生としてもっと貴重な経験を積むべきではないのか」と葛藤しながら朝から晩まで電卓をパチパチ叩いて勉強していました。ただ結果としては「やっぱり、根を詰めて勉強して良かったな」と思っています。試験に合格して公認会計士になれたからこそ、いろいろな可能性を切り拓くことができ、チャンスを得ることができました。受験勉強は非常に大変だと思いますが、ぜひ負けずに取り組んで、頑張ってくださいと思います！

このインタビューは2021年8月、リモートで取材をさせていただきまとめました。



公認会計士の バックグラウンドを力に。 日本とニューヨークを繋ぐ 私にしかできないこと。



日本・米国公認会計士 フリーランスとして活躍

須能 玲奈 Rena Suno

2004年公認会計士試験に合格し、あずさ監査法人の国際部に入所。製造業やサービス業を中心に、上場企業や欧米子会社の会計監査に従事。大学時代から憧れていたニューヨークで働くという夢を追い求め、2009年夏に退職し、渡米。語学学校にて学んだ後、現地の日系子会社、BDO USA, LLPを経て、Ernst & Young, LLPの日系企業部門に5年半在籍。米国公認会計士の資格(ニューヨーク州)を取得し、日本の上場企業の在米子会社や欧米企業の監査を行う。グリーンカード取得後、会計コンサルティング事業を行うConnor Group、日系企業の海外進出をサポートする日系ベンチャー企業の社長を経て独立。現在は金沢発のカレーチェーンであるGo Go Curryの経理・財務を統括する他、ニューヨーク最先端のビジネス等について日本のメディアへの記事の寄稿、会計に関する記事を中心に翻訳を行っている。著書に「ニューヨークで学んだ人生の拓き方：帰国子女でない私が11年のNY生活と米国企業で学んだ国際人になるためのヒント」(アマゾン・キンドル版)。

日本で会計士としての実務経験を積んだ後、憧れの地、ニューヨークへ。シビアなビジネス環境の中、確かなキャリアを築いてきた須能玲奈さんに、公認会計士の枠を超え挑戦し続ける意味や面白さなどについて伺いました。

公認会計士を目指すきっかけと キャリアのスタート

「公認会計士を目指したきっかけとどのようにキャリアをスタートされたかお話しいただけますか？」

慶應義塾大学に入学して間もない頃にたまたま参加したオリエンテーションで、監査法人で働く会計士のお話を聞く機会があり、その時に初めて公認会計士の資格のことを知りました。女性でも多様な働き方ができるということや、自分の意思でキャリアの選択が可能であるということを知り、とても興味を持ちました。そこで大学2年生の夏から勉強を始め、大学卒業後の2004年に試験に合格。その年の12月にあずさ監査法人の国際部に入所しました。

海外に興味があったので国際部を志望

し、希望の部署に配属されてすごく嬉しかったことは今でもはっきりと覚えています。当時のあずさ監査法人は設立2年目。国際部は、新日本監査法人から分かれてできたKPMGを母体とする小さなグループで、アットホームな部署でした。そこで上場日系企業の監査や会社法監査、外資系企業のリファーマル業務(アメリカやヨーロッパで上場している会社で日本に子会社がある会社の会計監査やレビュー)に4年半ほど携わりました。リファーマル業務は、規模がさほど大きくない1、2週間で終わる仕事でしたが、通常の日本企業の監査に加えてそうした監査ができたのも、国際部ならではの経験でした。当時は12月入社だったため、入社後すぐに外資系企業の決算の時期を迎えました。最初は、英語の試算表がまったく分からず、日英対応の会計辞書を使い、解読していました。また、現場では試験で勉強したことがそのまま応用できるわけではなく、実務とのギャップを感じる日々でした。

印象に残っているのはスタッフ1年目の終わりの頃、上場会社の監査をしていた時のことです。決算短信の発表前日に徹夜し、次の日はお昼を食べるのも忘れて無我夢中で仕事をしました。決算短信は

投資家向けに公表されるためたった一つのミスも許されないので、締切ギリギリまでハラハラしましたが、今となっては良い思い出です。

渡米に至る経緯と ニューヨークへの想い

「海外への興味、渡米のきっかけやニューヨークへの想いについて教えてください。」

私は英語の語感や響きが好きで、小学生の頃から英語のレッスンを受けたり、基礎英語のラジオを聞いたりしていました。中学生の頃には、英語が話せるようになれば世界中の人と交流することができ、自分の世界観が広がるのではないかとおぼろげに感じていて、その頃から海外、特にアメリカへの憧れは強かったです。大学時代には、全世界に支部を持つアイセック(AIESEC)という国際交流サークルに入りました。そのサークルを通じて東京へ企業研修に来ていたベネズエラ、カナダ、インドネシアなど多くの国の方々と週末に出かけたり、イベントを開催したりして楽しんでいました。

ニューヨークとの出会いは大学1年生の時のことです。友人と弾丸旅行でニューヨークに遊びに行った時に、多様な民族が生き生きと暮らすニューヨークの街に大きな衝撃を受けると同時に、直感で「この街は私に合っているのではないかと感じました。ニューヨークには世界中から夢を追い求めてやって来る人たちが後を絶たず、方言も入ると数えきれない種類の言葉が飛び交い、皆自国の文化や伝統を守りながら暮らしています。そこにいるだけで世界中を旅行しているような気分になれるのは、世界中を見渡してもニューヨークだけだと私は思います。旅行が好きなので、ニューヨークに移る前に世界中の様々な都市を訪ねましたが、日本以外で住みたいと思ったのはニューヨークだけでした。そして、最後の修了試験が終わった30歳になる目前、将来のことを真剣に考えた時に「渡米するなら今しかない」と思い、2009年の夏に会社を辞め、ニューヨークに渡りました。今でも多くの人に驚かれますが、無職での語学学校生からのスタートでした。私は長期間ニューヨークで生活したかったので、会社のシニア派遣制度などは考えませんでした。4年制の大学や2年制の大学院を卒業すると、OPTというビザがもらえるため、一般的にはOPTを使って就職してから就労ビザを取る、という流れなのですが、私の場合は会計士と

して日本で4年半の社会人経験があったので、学生ビザで渡米し、語学学校に行きながら仕事を探す、という方法になりました。ちょうどリーマンショックの直後で、リストラもあるような状況でしたので、タイミング的にはあまり良くなかったかもしれませんが、良い仲間たちに恵まれたあずさ監査法人は素晴らしい職場環境でしたが、「先は分からないけれど自分が本当にやりたいことをしてみよう」という気持ちが強くなったことが、渡米の大きなきっかけになりました。

―渡米してからはどのようなキャリアを積まれたのでしょうか？

最初の1年間は現地の語学学校に通っていました。自分が好きなニューヨークの街に住んでいるだけで幸せでしたが、無職だという不安は常にどこかにありました。そのため、早く仕事に就けるように今できることに取り組もうと、毎日必死に英語を勉強しました。貯金が底をつく前にビザが取れなかったら日本へ帰国しなければいけない状況で、リスクと隣り合わせ。日本での4年半の会計監査の経験があればニューヨークで就職できるのではないかという想いを強く持って就職活動を続けました。そして、渡米から1年後、日本の上場会社のニューヨークの子会社で経理と総務を担当させていただくことになりました。前述し

たように、アメリカではOPTを持っていない人を会社が雇うことはめったにありません。会社側からすると私がどのような人か分からないまま就労ビザのサポートをしなければいけないため、リスクもあったと思います。それでも雇ってくださった最初の会社には本当に感謝しています。

しかし、その会社で経理の仕事をするうちに、監査人としてアメリカの監査現場を見てみたいという気持ちや、米系企業でアメリカ人と肩を並べて仕事をしてみたい、という渡米時に抱いていた気持ちが蘇ってきました。日本で働いていた時から、アメリカのBig4で監査の現場を経験したいと思っていて、それはグリーンカードを取得することと合わせて渡米時の大きな目標でした。ちょうどその時、BDO USA, LLPのニューヨーク事務所が、日本のクライアントを増やすために日本人会計士を探していてご縁をいただきました。部署には日本人が誰もおらず、まだ英語もおぼつかず、毎日が仕事よりも英語の勉強、というような状況でしたが、アメリカ人の仕事のスタイルやビジネスの現場での振る舞い方などを間近で見ることができたのは、今でも私がアメリカ人と仕事をする際の基盤になっています。その後、監査人としてBig4での経験を積みたいと思い、Ernst & Youngの日系企業部門に転職し、5年半、日系子会社や欧米の会社の監査に従事しました。また、会社のサポートで渡米時の最大の目標であったグリーンカードを取得することができました。

大好きなニューヨークで一般企業と監査法人での仕事を体験し、渡米時の目標でもあったBig4での監査経験を積むという目標も達成できた時、日本人の私にしかできない日米をつなぐ仕事をライフワークにすることを決めました。アメリカのコンサルティング会社を経て、日本の地方創生をテーマに日本独自の様々な商品や、職人さんの伝統工芸品をニューヨークでテストマーケティングとして扱うセレクトショップの経営を友人に頼まれたことをきっかけに、雇われ社長の形で店舗経営や日本の伝統文化を紹介する数々のイベントを



企画から実行まで指揮監督しました。コロナ禍での諸事情もあり、2020年の夏からフリーランスになり、Go Go Curryという金沢発のカレーチェーンの米国展開を行っている会社の経理と財務全般を統括する仕事を中心に、ライターとしてニューヨークのビジネスや文化などについての記事を日本のメディアに寄稿しています。

公認会計士としての矜持と キャリアに与えた影響

—実際に公認会計士になって良かったと思う瞬間などエピソードを添えて教えてください。

公認会計士になって良かったと常々思うのは、帰国子女でない私が大好きなニューヨークに渡り、グリーンカードを取得して働く、という夢を叶えることができたことです。異国の地で働くことは決して簡単なことではありませんが、会計監査のバックグラウンドがあったからこそ、就労ビザを取得して、米系企業で仕事をすることができました。アメリカの就労ビザの申請では、「アメリカ人ではできない」仕事であることを移民局にアピールすることが必要です。私の場合は、会計監査と日本語で仕事ができるという強みの組み合わせが、様々な場面で役立ちました。ニューヨークで仕事をする場合でも、日系子会社のクライアントの場合、担当者が日本人ということもありましたし、日本の本社の役員や監査人とやりとりを行う機会もあります。アメリカで育ったりアメリカの大学に進学したりして日本で就労経験がない場合、敬語を使うことや日本語で会計監査の話することに抵抗があるように感じました。そのため、日本語と英語で会計監査の仕事ができることは大きな強みとなり、会社でも高く評価してもらえました。やはり、日本で会計監査の経験を積んでいたからだと、今でもあずさ監査法人時代にお世話になった部署の皆様に感謝しています。

—監査法人でのお仕事その後のキャリアに与えた影響等についてお伺いできますか？

監査法人の仕事は特殊で、監査の過程で様々な部署の人と話をしたり、普通の人になかなか見ることができない資料を見たりする機会が数多くあります。また、年間を通じて多岐にわたる業種や大小様々な規模の会社に行く機会もあります。そうした経験を通して、俯瞰的な視点から会社がどのように動いているのかを間近で見ることができるのは、監査法人ならではの魅力だと思います。それは監査の現場を離れた今でも生きていて、例えば記帳作業もただ事務的に行うのではなく「この数値はなぜこうなったのだろう」、「この点はオペレーションで改善できるのではないか」ということを数字面から浮き彫りにして、すぐに社長や周りの人に相談することができます。数値だけで会社の業績を追うのではなく、会社全体の経営という観点からも会社の動きを見ていけるのは、会計監査の経験があったからだと思います。また、監査の仕事では、特にマネージャー以上になると様々な責任が発生し、進捗管理はもちろん、社内外のミーティングをリードし、税務やIT部門を含めたチーム全体のマネジメントも要求されます。特にニューヨークで仕事を始めてからは、バックグラウンドの異なる様々な国の人たちがチームにいましたので、彼らのモチベーションをどのようにあげるか、チームをどのように統率していくか、といったことを常に考えていました。こうしたマネジメント能力は、監査の現場で鍛えられた部分が大きいと思います。

求められる英語力 活躍のためのスキルとは

—一次に、海外で、多国籍な環境でお仕事をするにあたって大変だったことをお聞かせください。

ニューヨークで働き始めてから数年間、何より大変だったことは、英語の壁です。

監査や会計の知識や経験がどれだけネイティブの方よりあったとしても、英語が流暢でないとアメリカで正当に評価してもらうことはできないと思います。例えばBDO USAに在籍していた時は部署に日本人が誰もいない状況でしたので、周りの人たちにとって英語をネイティブと同様に話すことは当たり前。ネイティブのように英語を話せない私に対して、表立って口には出さないけれど、「彼女は英語をきちんと話せていないけど仕事は大丈夫だろうか」と、見ているのではないかと感じてしまう場面は多々ありました。そうした経験を通して、ネイティブのアメリカ人と肩を並べて仕事をするためには、相手の主張を正しく理解し、自分の意見をしっかりと英語で言えるレベルの英語力が必須だと思い、それは私が英語の勉強を続ける大きなモチベーションになっていました。具体的には、職場でネイティブの人から届いたメールや同僚の会話に出てきた知らない単語や表現はその都度英英辞典で調べ、一つずつ覚えていきました。英英辞典を見ている姿は前述した理由から決してアメリカ人の同僚には見せられなかったのですが、こっそりと英語を学ぶ日々でした。

—公認会計士として国際的に活躍するにあたって大事なことや大切にされていることがあればお聞かせください。

3つあると思います。ひとつはやはり、英語力。渡米当初、読むことはある程度できても、ネイティブの同僚たちの話が完全に聞き取れなかったり、自分が言いたいことがうまく表現できず、もどかしい思いをすることが多かったです。言葉はコミュニケーションの手段なので、受身ではなく自ら発信していかないと相手と分かりあうことはできませんし、英語がビジネスの場面で問題なく使えないと、英語以外の能力について疑問を持たれてしまうことも事実です。日本では、日本語が母国語でない海外の方に対して、相手に配慮してゆっくり日本語を話すことが多いと思いますが、アメリカは良い意味でも悪い意味でも気を遣わない文化なので、私がネイティブではないから

とって話す速度を遅くしてくれることはあまりありません。ネイティブと同様に接してくれるのは、差別をしていないという意味でありがたいことですが、厳しさもあります。英語圏での仕事を考えた場合、実践的な英語力は不可欠だと思います。

2つ目は専門性です。私の場合、日本で会計監査の経験がニューヨークの監査法人での仕事で非常に役立ちました。グローバル展開をしているBig4のような監査法人の場合、全世界で統一されたツールを使用していますので、監査のやり方や考え方は世界共通の部分が多いです。そのため、国が変わってもこの部分で困ることはありませんでした。このように、日本で会計監査の知識をしっかりと学ぶことができて良かったと、渡米してから感じる場面は多かったです。

最後の3つ目は、自分にしかできないことを強みにする、ということです。たとえ言葉のハンディがあったとしても、他の人に見えない強みがあるユニークな人材であれば、アメリカでは面白い人材として認めもらうことができます。私にとってそれは、会計監査とビジネスの場面で使える日本語の掛け合わせでした。英語が流暢な日本人であっても、日本で社会人経験がない等の理由で、クライアントや日本の本社チームとやり取りすることに抵抗がある同僚たちがいる中、日本の監査現場での就労経験が私の大きな強みであると感じたのは、アメリカで働き始めてからのことです。日本では当たり前だったことが、場所が変わると強みになるのはとても面白いと思いました。このように掛け算的思考で自分の強みを組み合わせて、自分にしかできないキャリアを築いていけば、語学の面で多少のハンディがあってもカバーできると思います。

話は少し変わりますが、日本の公認会計士試験はかなりレベルが高い、ということを実感しています。アメリカでは、USCPAの試験に受かっていない状態で監査法人に入所し、働きながら最終的に全科目を合格するというスタイルが一般的です。試験内容は日本の方がはる



かに難易度が高く、日本の会計士試験に合格した時には、かなりの基礎学力が身についていると思います。そういった意味でも、日本の公認会計士の資格は海外でそのスキルを活かすことができ、将来の視野も無限に広がっていくのではないのでしょうか。

海外で働くためのポイント 日本人であることを生かす

一須能さんが考える海外で働くことに向く人はどんな人でしょうか。

何と言っても柔軟性のある人だと思います。海外での暮らしは、日本のように便利なことばかりではないですし、宗教上の制限があって食べるものが限られている同僚と一緒に仕事をする場合は、私自身が食べるものにも制約が出てきます。そうした状況に柔軟に対応し、様々な宗教や価値観を持つ人々を尊重して仕事をしたいとチームとして機能しません。また、アメリカはワークライフバランスをとても重視しているので、その対応も必要です。例えば金曜日であれば5時を過ぎたらオフィスは空で、6時過ぎまでオフィスに残っていると「どうしたの？大丈夫？」と、

違う部署の人にも言われてしまうくらいです。繁忙期でも自分の人生を最優先していて、その過ごし方も日本とアメリカでは大きく異なるように感じます。チームを統括する立場になった場合、こうした違いを受け入れ、自ら率先してチームメンバーへの配慮を行うことも大切です。ニューヨークのように人種のもつとと呼ばれる都市では、育った環境や考え方、生き方が違う人たちばかりですので、どれが良いとか悪いとかではなく、その状況をそのまま受け入れるという柔軟性が必要だと思います。

一今後のキャリアビジョンについて教えてください。これからの夢や目標などがあれば併せて教えてください。

アメリカに移ってすぐに、日本人はアメリカのことをよく知っているのに、日本のことをほとんど知らないアメリカ人が多いというギャップに衝撃を受けました。日本には伝統工芸品など世界へ誇るものがたくさんありますが、海外での知名度はそれほど高くありません。これからは、もっと日本の良さを海外の人に知ってもらうための活動をしたいです。

また、ニューヨークに憧れて、ニューヨークでビジネスをしてみたい人もたくさんいらっしゃると思いますが、日米の商環境の

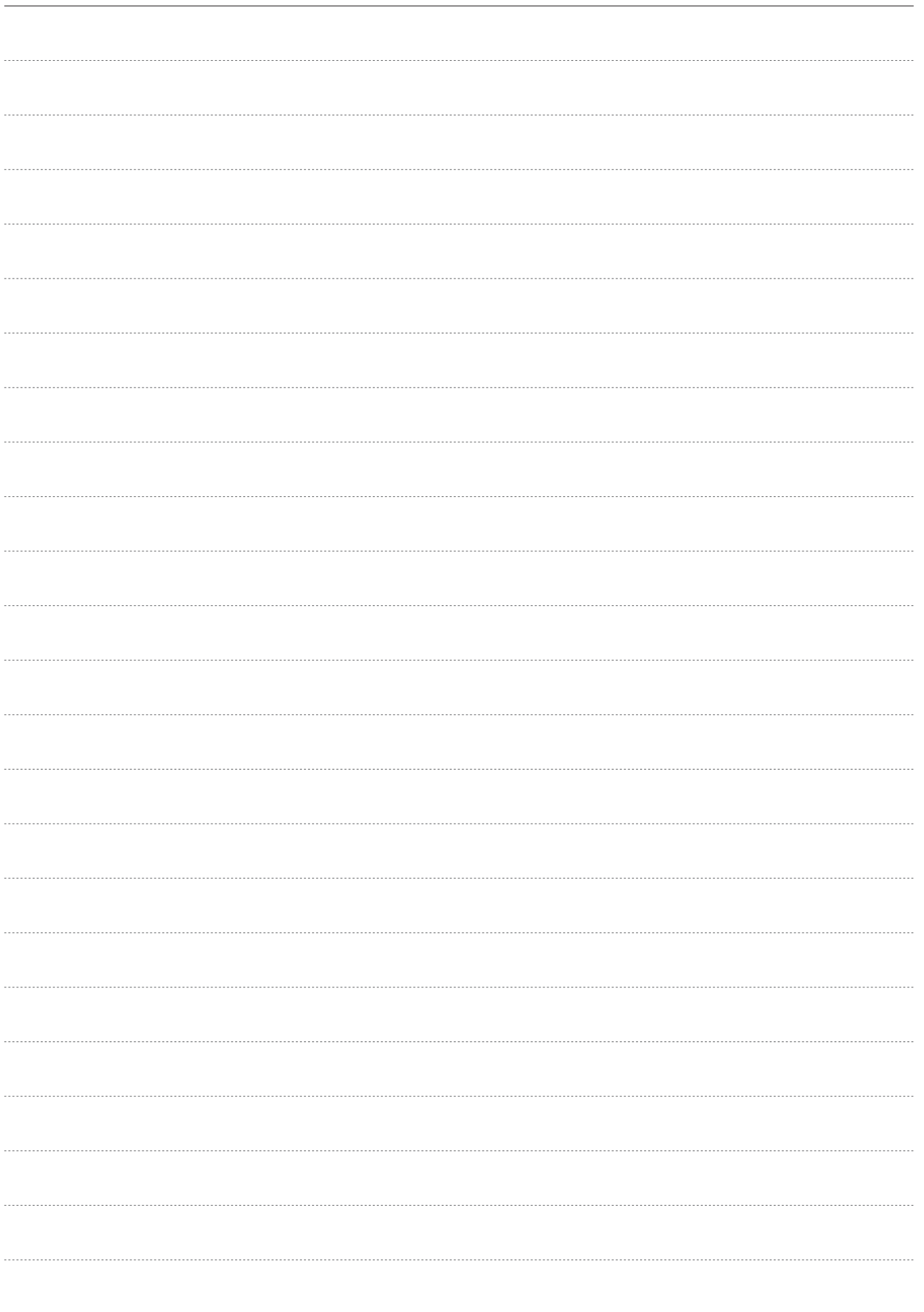
違いや言葉の壁などがあって、なかなか拠点を移すまでに至っていないと思います。たとえば会計の世界を見ても、日本人は勤勉で、優秀な会計士が多いのに、海外に出ている方が少ないのはもったいないです。思い切って一步日本の外へ踏み出してみると、日本ではできないような体験ができ、人生の幅が広がることは間違いありません。そこで、無職からスタートしてグリーンカードを取得した私の渡米体験が、海外で働くことを夢見ている方々の何かの参考になれば、という思いで、2020年の秋に「ニューヨークで学んだ人生の拓き方」というKindleの本を出版しました。帰国子女でなく、会社派遣などの形でなくても、やる気と夢を持っていれば海外で働くことができることを、公認会計士の資格を生かしながらここまでやってきた自分の体験を通じて、もっと多くの人に伝えることができたら、と考えました。その本がきっかけで、今年の春には愛知県立大学の学生さん80人を前に、将来のキャリアを考える授業で、私自身の渡米体験についてお話しする機会に恵まれました。今後も私の経験をシェアすることで、海外での生活に憧れている人たちの夢や希望を後押しすることができたら、と思っています。

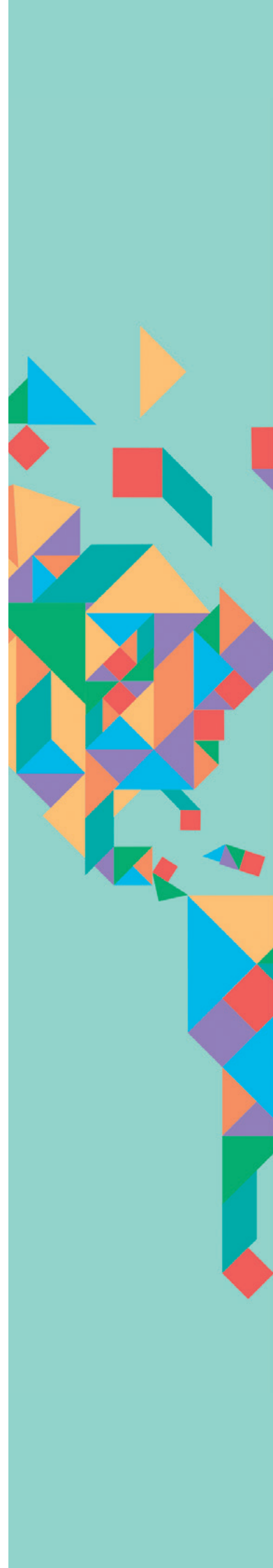
一最後に、公認会計士を目指す学生たちにメッセージをお願いします。

公認会計士は様々な可能性を秘めていると思います。日本では公認会計士イコール監査法人に入所、または監査法人を経て一般企業の経理へ、というキャリアパスが主流になっていると思いますが、アメリカの場合、「会計はすべての基本」と考えられていて、経営者自身や主要部署のトップが会計士だったり、会計を使っているようなキャリアパスが広がっているように感じています。どのような分野で働く場合でも、利益体質の会社にするためには、財務会計や管理会計の考え方が基礎となってきますので、公認会計士としての知識や経験は重宝すると思います。受験生の方には、勉強で学んだことが今後にも繋がりに、公認会計士の資格を持つことで将来の可

能性は無限に広がっていくと信じて、頑張ってくださいと思います。

このインタビューは2021年8月、リモートで取材をさせていただきまとめました。





Vision for the future. 1~5はこちらのリンクよりご覧いただけます。



日本公認会計士協会

The Japanese Institute of Certified Public Accountants

〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1

TEL:03-3515-1120(代表) 03-3515-1130(国際渉外グループ)

<https://jicpa.or.jp/>